

# 乳幼児の手あそび歌に見られるオノマトペとリズムパターン

茂野 仁美\*

## Onomatopoeia and Rhythm Patterns in “Finger play songs” for Infants

Hitomi Shigeno

---

【キーワード】手あそび歌, 乳幼児, オノマトペ, リズムパターン  
Finger play songs, Infants, Onomatopoeia, Rhythm Patterns

### 1. はじめに

保育の場では、乳幼児たちは日々多くの音楽に触れている。幼稚園教育要領など、三法令の保育内容「表現」の活動の中心的なものの1つという側面だけにとらわれることなく、音楽は様々な活動とかわって、あいさつや季節の歌、手あそび歌、ダンスや体操などの身体表現を伴う楽曲などさまざまに取り組みされている。また、保育の場だけでなく、家庭においても同じで、乳児に対して養育者が歌いかける伝統的な子守唄や、幼児番組や幼児向け映像コンテンツなどでも、さまざまな音楽が使われており、子どもたちはそれらを視聴し歌ったり、踊ったりしている。保育や育児において、音楽は楽しむという側面以外に、教育的な側面も持っている。しかしそれは、子どもにとっては教えられているというよりも、遊びの一部として存在している。これは、音楽が乳幼児の活動の中に溶け込みいずれの年齢に対しても、自由自在な活動を可能にし、多くの学習的な内容を子どもの遊びの中に組み込むことのできるものであるからこそだと言える。

これらの乳幼児が触れる音楽の歌詞には、オノマトペが多く使用されている。そのオノマトペは乳幼児の動きを引き出すのに有効であることが示唆されていることについて、小川ら (2013)<sup>4)</sup>や、武田 (2015) が検討を行っており、その有効性を確かめている。オノマトペは手あそび歌にも多く使用されており、乳幼児にとって取り組みやすいものとなっていることが考えられる。

本稿においては、乳幼児の保育教材としての伝統的なわらべ歌や手あそび歌から、それらに含まれるオノマトペとリズムパターンについて、その特徴と出現頻度について、また、対象年齢別でのそれらの特徴について検討する。

---

所属および連絡先  
\* 大阪千代田短期大学

## 2. 問題と目的

### (1) 手あそび歌の定義

保育の場において手あそび歌は、保育内容「表現」の活動としてという目的のほかにも、さまざまな場面で行われるものである。しかし、手あそび歌をなぜ行うのかということについての研究は非常に少ない。今川（2016）によると、手あそび歌を通して子どもたちの何が育つのかということにはあまり考えられていないことが理由<sup>1)</sup>だと挙げられている。また、この手あそび歌というのも非常に幅が広いもので、実践のための書籍はたくさん出版されているが、その内容は、日本の伝統的なわらべ歌や、手指を使って1人や2人以上で行う歌、大きな移動は伴わないが、その場での全身での運動を伴う歌などさまざま、さらには伴奏を伴うものもあれば、伴奏を伴わずに行うものも掲載されている。そして、その定義はあいまいで、北村（2006）は保育現場においては人それぞれ異なると指摘している<sup>2)</sup>。いずれにしても手あそび歌については、乳幼児の活動において多用されている一方で、じっくりと取り上げられることは少なかったということではあるが、手あそび歌を保育者が多用するのはやはり、子どもたちとのやり取りの中で、何らかの意味や効果のあるものだと経験的に知っているからだろう。手あそび歌は、保育の合間を埋めるものという側面だけでなく、本来もっと豊かに保育内容を充実させたり、乳幼児の成長発達を促していく可能性があることが考えられるものである。そこで、本稿においての手あそび歌は、リズムと二音以上の音階を持ち歌詞と手などの身体の動きを伴う、日本の伝統的なわらべ歌、歌に合わせて手指を使って遊ぶ歌、大きな移動は伴わずその場で行う全身での運動を伴う歌で、それらは1人ないし2人以上の複数で行えるものと定義して、検討の対象とする。

### (2) オノマトペと音楽と幼児の動き

オノマトペとは、ものの音や動物の鳴き声をまねた擬声語（ドンドン、ガタンゴトン、ワンワン、ピョピョなど）や、状態をまねた擬態語（ピョンピョン、ヨチヨチ、フワフワなど）のことである。擬声語や擬態語といったオノマトペは、養育者が乳幼児に向けて発する育児語の中でも使用頻度の高い語彙（小椋ら、2015）<sup>3)</sup>だと言われており、日常の大人の会話においても言葉として存在しているものである。乳幼児の触れる音楽にもオノマトペは多く登場していて、先行研究においてオノマトペは、乳幼児の動きを引き出すのに有効であることが示唆されており、乳幼児にとって身近なもので、よりリアルさを感じさせたり、リズムを表す運動を促進させるのではないかと結論付けられている（小川ら、2013）<sup>4)</sup>。武田（2015）は、オノマトペは乳幼児にとって音楽的な意味を持って表現しやすいというメリットとして「①短い単語で発せられ、②リズムが単純であり、③繰り返しのリズム表現が多く、④大半が2拍子系である」という4つの特徴をあげ、リズム面への育成に寄与できると述べている。

### (3) 手あそび歌の分析の目的

本稿では、乳幼児の保育教材としての伝統的なわらべ歌や手あそび歌から、それらに含まれるオノマトペとリズムパターンと、その特徴と出現頻度について、また、対象年齢別でのそれらの特徴について検討する。手あそび歌は保育の場で、経験的に多く取り組まれている一方で、子どもの発達を促し、保育を豊かにする可能性については、保育者からは厳密には意識されていないと考えられる。オノマトペ

は子どもの動きを引き出しやすく、音楽的な意味を持っていて表現のしやすさをもつことから、手あそび歌の楽曲のリズムやオノマトペとその組み合わせについて整理することは、より子どもの発達を踏まえて手あそび歌を取り入れていくことに貢献できるものと考えられる。また、保育者が経験的に取り組んできた手あそび歌の保育の中での位置づけを、保育の合間を埋めるものというだけでなく、その合間の保育内容の活動の一つとしてとらえていくことのできるものとする可能性も考えられる。そして、近年増加している発達障害やその疑いの子どもたちへの発達支援としても、系統立てて組み込むことにつながる可能性もあるだろう。

### 3. 手あそび歌の分析

#### (1) 分析の対象楽曲

手あそび歌の分析にあたり、本稿では『幼稚園・保育所実技実習シリーズ2 0～5歳の手あそび・指あそび』（阿部ら，1987）、『楽しみながらことばが育つ おもしろ手遊び指遊び』（斎藤，1986）、『0・1歳児のふれあい歌あそび』（塩野，2001）を使用した。これらは筆者が医療機関での子育て支援の活動として「親子音楽あそび」を行った際（木野，2019<sup>5)</sup>の手あそび歌使用時に活用していた楽譜集で、2010年代に発行された手あそび歌を扱った楽譜集の収録曲と差異はなかったため、分析対象とした。

#### (2) 分析方法

本稿においてのオノマトペは、ものの音や動物の鳴き声をまねた擬声語と、ものや動物の動きを表すものや動作に伴って発せられる擬態語を対象とした。楽曲の中の1ヶ所以上に定義したオノマトペの見られた楽曲を対象として、曲名の抽出、出現しているオノマトペの抽出を行った。またオノマトペの部分のリズムパターンについても抽出した。

### 4. 分析結果

#### (1) オノマトペが含まれた楽曲数

収録曲中、オノマトペが含まれた楽曲は、『幼稚園・保育所実技実習シリーズ2 0～5歳の手あそび・指あそび』が28曲中19曲（68%）、『楽しみながらことばが育つ おもしろ手遊び指遊び』が50曲中29曲（58%）、『0・1歳児のふれあい歌あそび』が63曲中28曲（44%）であった。すべての収録曲141曲中の53%である75曲がオノマトペを含んだ楽曲であった。

#### (2) 楽曲に含まれているオノマトペと対象年齢での特徴

オノマトペの含まれた楽曲75曲から、オノマトペを抽出した。その結果、97種類のオノマトペが出現していた。複数の楽曲で出現していたオノマトペを表1に示す。「トントン」は16曲に見られた。次いで「ぽんぽん」は8曲、「コロコロ」5曲、「コチョコチョ」「ドンドン」は4曲に見られた。動物の鳴き声や足音などに関わるオノマトペは21曲に見られた。オノマトペのうち、状態をまねた擬態語が

35曲、ものの音や動物の鳴き声をまねた擬声語が25曲であった。これ以外の16曲は動きの様子や動物の鳴き声などを表しているものではなく、楽曲の中でのリズムを表すものとして出現していた。

楽曲の対象年齢について、『幼稚園・保育所実技実習シリーズ2 0～5歳の手あそび・指あそび』と『0・1歳児のふれあい歌あそび』は、それぞれの楽曲に対象年齢が記載されていたが、『楽しみながらことばが育つ おもしろ手遊び指遊び』は対象年齢の記載はなかった。対象年齢を示した楽譜集に掲載されていたオノマトペの含まれた47曲

のうち、出現しているオノマトペに年齢ごとの特徴であるが、一番多い「トントン」はいずれの年齢でも出現しており、その他のものについてもいずれかの対象年齢の楽曲への偏りはなかった。

身体部位を指し示し触れたりたたいたりするといった動作に関わるオノマトペが含まれた楽曲は、0～2歳児向けの14曲に見られた。0～2歳児むけで、身体部位を他のものに見立てた楽曲は20曲であった。0～2歳児向けの楽曲は34曲あり、このうち身体部位を直接指し示すものは38%だった。3歳児以上を対象とした楽曲12曲中では、身体部位を直接表すものは2曲で、他は身体部位を他のものに見立てた動作に関わるものが12曲であった。対象年齢の示されていない楽譜集29曲のうち、身体部位を直

表1 オノマトペの出現回数

オノマトペ	出現曲数
トントン	16曲
ボンボン	8曲
コロコロ	5曲
コチョコチョ	4曲
ドンドン	4曲
動物に関わるもの	21曲

表2 『0～5歳児の手あそび・指あそび』の楽曲のオノマトペ

番号	曲名	拍子	楽曲中のオノマトペ	対象年齢
1	おつむてんてん	4/4	てんてん、ぼんぼん、ばぁ	0歳から
2	すいか	4/4	ウントコショ、プップップ	
3	山のぼりホイ	2/4	チョコチョコ、ニョロニョロ、ドンドン、ホイ	
4	おててを1, 2の3	2/4	ブラブラ、ぐるぐる、トントン、パッ	2歳から
5	てんぐのはな	2/4	おとととと	
6	あたま・おはな・おめめ	2/4	ペッチャーン、モグモグモグ、サッサッサー、チーン、パチパチパチ、シー	3歳から
7	1丁目のドラねこ	2/4	ニャオー	
8	せんたくきグルグル	4/4	グルグルグルル、カチッ、ブクブクブク	
9	ひとつふたつグーパー	4/4	ぐるりんぼん、ちょろりんぼん、パラリンボン	4歳から
10	トントンパチパチ	2/4	トントン、パチパチ	
11	あさがおコリャコリャ	4/4	コリャコリャ	4歳から
12	うさぎさんよくみてね	4/4	にこにこ	
13	はちべえさんとじゅうべえさん	2/4	ゴツツンコ	
14	たまごでおりょうり	4/4	ボン、ジュージュウ、グラグラ	4歳から
15	ねずみのはみがき	4/4	ガリガリガリ、カリカリカリ、ポリポリポリ、コリコリコリ、シュッシュ	
16	フルーツパフェ	2/2	ルンルンルン	4歳から
17	じょうぶなイスですよ	4/4	ギーゴギゴギコ、シューシュシュッシュュッシュュ、トントントン、ペータペタペタ	
18	てとあしグーパー	4/4	トントントン	
19	大きなかぶをぬこう	4/8	ハイハイハイ、ウントコドッコイ、ドッコイショ	17

接表す楽曲が7曲、身体部位を他のものに見立てた楽曲が18曲であった。

各楽譜集から抽出したオノマトペについては表2、3、4に示す。

表3 『0・1歳児のふれあい歌あそび』の楽曲のオノマトペ

番号	曲名	拍子	楽曲中のオノマトペ	対象年齢
1	いないないかくれんぼ	2/4	てんてん、ぼんぼん、ばぁ	3～ 5ヶ月
2	おでこはででん	2/4	でででん、ペペペン、めっめめっ	
3	おおやまこやま	2/4	コチョコチョ	
4	ゆらゆらトントン	4/4	ゆらゆら、トントン	
5	たぬきはぼんぼこ	2/4	ぼんぼこ	
6	とうきょうとにほんばし	2/4	コチョコチョ	6～ 11ヶ月
7	ドンブラコ	2/2	ドンブラコ、ポチャン、ドシン	
8	ほっぺをつつこうトントントン	4/4	トントントン	
9	はらぼんこ	2/4	ぼんこ、トントン	
10	キャベツのおやまに	4/4	こちょろりこ、ちゅうちゅうちゅう	
11	あかちゃんたいこ	2/4	トントコトン	
12	ゆらゆらボート	6/8	ゆらゆら	
13	パパのおうま	2/2	パッパカ	
14	おうま	4/4	パカッパカッパカッ	
15	たいこをたたきましよう	4/4	どど、どんどこどこどん、どんどんどん	1～ 1歳 6ヶ月
16	ひらひらひら	4/4	ひらひらひら	
17	ずっとあいこ	4/4	チョキチョキ	
18	にぎにぎぼんぼんぼん	4/4	にぎにぎ、ぼんぼんぼん、ワンワンワン	
19	トントントンあたまだよ	4/4	トントントン	
20	かぜひききつね	2/4	コンコン	
21	かぜとことりとこえだ	2/4	ピーチクピーチク	
22	どんぐりころころ	2/4	ころころ、	
23	トンパバリ	4/4	トンパバリ、トントン	
24	すべりだい	4/4	コロコロロン	
25	まほうのゆび	4/4	ピピピピ	1歳 6か月 ～ 2歳
26	コロコロたまご	4/4	コロコロ、ピヨピヨ、コケコッコ	
27	まあるいたまご	4/4	ピヨピヨピヨ	
28	あまさま	2/4	とんとんとんとん	0～1歳

表4 『楽しみながらことばが育つ おもしろ手遊び指遊び』の楽曲のオノマトペ

番号	曲名	拍子	楽曲中のオノマトペ
1	あかちゃん	2/4	ぶんぶんぶん
2	とうさんぶた ブブブ	2/4	ブブブ、キキキ
3	あくしゅでこんにちは	2/4	てくてく、もにゃもにゃ
4	はたけにいこう	3/4	ヨイショ
5	こびとのおうち	2/4	ラッタラッタ、ラッタラ
6	おはなしゆびさん	4/4	ワハハハ、ホホホホ、へへへへ、ウフフフ、アブアブアブ、ウマウマ
7	かいぐり	4/4	チョチチョチ、アワワ、ボンボン
8	ててて	4/4	トントントン、ころころころ
9	ひげじいさん	4/4	とんとんとんとん、ひらひらひらひら
10	いとまき	2/4	トントントン
11	たまご	4/4	ピヨピヨピヨ
12	おべんとうばこあけたらね	4/4	パクリンコ、パクパクパクパク
13	グーチョキパーでなにつくろう	4/4	ピョンピョンピョン、ヒラヒラヒラ、のーそのそ
14	わたしはねこのこ	4/4	クリクリクリクリ、ピンピンピン
15	いちわのからすが	4/4	かーかー、こけこっこ、ゴロゴロ
16	かなづちトントンくぎ1本	4/4	トントントン
17	ガッタンゴットンしゃしょうさん	2/4	ガッタンゴットン、チリリン、ジャブジャブ
18	やまごやいっけん	4/4	ピョンピョンピョン
19	いっぼんばしいっぼんばし	2/4	コチョコチョ
20	こんにちはどなたです	4/4	ピョンピョン
21	こぶたぬきつねこ	4/4	ブブブー、ボンポコボン、コンコン、ニャーオ
22	あたまかたひざボン	4/4	ボン
23	てをたたきましよう	4/4	タンタンタン、アッハッハッ、ウンウンウン、エンエンエン
24	パンドンタン	4/4	パンパンパン、ドンドンドン、タンタンタン、パンドンタン
25	だしてひっこめて	2/4	トントントン
26	あかちゃんおやすみ	4/4	スースー、ピーピーピー、ムニャムニャムニャ、クークークー、グーグーグー
27	おもちさん	2/4	コロ、プクン
28	ハンカチのりまき	4/4	くるくる、まきまき、ムシャムシャ
29	やきいもグーチャーパー	4/4	ほかほか

## (3) オノマトペの歌詞のリズムパターン

楽曲の拍子は4/4拍子は43曲、2/4拍子は29曲、3/4拍子、6/8拍子、2/2拍子はそれぞれ1曲ずつであった。多くが二拍子系と四拍子系で、三拍子系はごくわずかであった。二拍子系では、四分音符+四分音符でのリズムのものと八分音符+八分音符+八分音符+八分音符でのリズムのもので、両者が複合した四分音符+八分音符+八分音符のものもあった。また付点八分音符+十六分音符のリズムもみられた。それぞれの譜例は図1に示す。四拍子系では、四分音符4つで構成されたものと、付点八分音符+十六分音符で構成されたものがあった。オノマトペの部分に付点八分音符+十六分音符の組み合わせ

が使用されている楽曲は20曲が該当した。譜例は図2に示す。三拍子系のリズムパターンは付点八分音符+十六分音符が含まれていた(図3)。

図1 二拍子系の楽曲に見られたリズム例

図2 四拍子系の楽曲に見られたリズム例

図3 三拍子系の楽曲に見られたリズム例

#### 4. 考 察

収録曲141曲中の53%、75曲もの楽曲にオノマトペが含まれていることがわかった。出現していたのは、オノマトペの特徴である反復や特殊音節<sup>6)</sup>を持つものであった。反復のないものは、楽曲の終止や掛け声に用いられていた。オノマトペは歌詞の一部としリズムと音程にのせられていて、それは、日常会話でのイントネーションと、言葉のリズムに則っている。話し言葉であれば、四分音符

や八分音符に採譜できるものでも、付点八分音符+十六分音符にのせられているものもある。葛西(2012)<sup>4)</sup>が、オノマトペが周囲の言葉以上にリアルな場面を描写するとしているように、同じオノマトペでも、どのようなリズムに乗せられるかによって、動きの歯切れやスピード感、力強さが異なり、楽曲のテーマとする遊びのリアルさに関わって、さまざまなリズムに乗せられていると言える。しかし、リズムパターンについては、オノマトペにつけられているリズムのうち、四拍子系で付点八分音符+十六分音符が20曲にのぼった。福崎(1995)によると、保育教材の楽曲でのリズムパターンは、八分音符+八分音符が一番多く23.2%、付点八分音符+十六分音符がその次に多く21.7%であるが、6歳児の事例でこのリズムに合わせる、つまりリズム同期させることは困難な傾向にあったことが報告されている<sup>7)</sup>。本稿で取り上げているのは、オノマトペにつけられている付点八分音符+十六分音符について言及しているが、楽曲中のオノマトペではない部分でのこのリズムパターンも含むと32曲(22%)にのぼるので、同様の結果だと言える。リズム同期が難しいにも関わらず、付点八分音符+十六分音符が保育教材には含まれており、動作を伴う手あそび歌にも多く含まれている。では、手あそび歌の振り付けも付点八分音符+十六分音符を刻む動きがつけられているのだろうか。実際の振り付け自体は、付点八分音符+十六分音符に対して、合わせられる動きは四分音符の動きであり、正確に付点八分音符+十六分音符に同期することとは異なり、年少の幼児でも十分、手あそび歌を楽しめる構成だと考えられるだろう。これは、歌唱でのリズム同期とは異なる点ではないかと考えられる。

次に、対象年齢別で楽曲中のオノマトペの特徴は見られなかったが、楽曲自体では、0~2歳児向けの楽曲のうち、身体部位を直接指し示すものの割合が、3歳以上向けの楽曲より多い。これは、発達段階との関連だと考えられる。0~2歳児向けの身体部位を直接指し示すものでは、オノマトペが意味を持つ言葉としてよりも、「トントントン あたまだよ」という歌詞で、リズムを刻むものとして使用されている。これに対して、3歳以上向けの楽曲では、リズムとしてオノマトペを含んだものもあるが、掛け声や楽曲の次のフレーズへのつながりといった要素で使用されており、このことから、同じオノマトペでも、対象年齢によって、その使用のされ方が異なる点だととらえることができるだろう。3歳以上向けの楽曲では「トントントン」はくぎを打つ音など、何かを見立てた上でのオノマトペである。また、対象年齢が示されていない楽譜集に収録されていた楽曲についても、直接身体部位を指し示す楽曲は、経験的に0~2歳児の保育で使用されている「かいぐり」や「いっぽんぼし」「あたま かた ひざ ぼん」などであった。0~2歳児は、ピアジェの発達段階では「感覚運動期」に該当する。この時期は見る、聞く、触れるなどの感覚運動を通して外界への働きかけを繰り返し、そして外界の特徴を理解していく時期である。言語発達についても、共同注意や指さしなどの前言語期の大切な時期であるし、多くの言葉を獲得していく時期である。身体部位に触れながら、オノマトペをリズムカルに繰り返す手あそび歌は、この時期の発達に課題に即した楽曲となっているといえるだろう。

保育において手あそび歌に取り組む際には、子どもの発達段階がどの時期で、どのような経験が必要であるのかをふまえて選曲する必要がある。本稿で取り上げた75曲に含まれるオノマトペは繰り返しのリズム表現で単純なリズムであり、それらのオノマトペは四拍子系と二拍子系の楽曲にのせられており、武田(2015)の挙げた4つの特徴と合致している。また小川ら(2013)<sup>4)</sup>が述べているように、オノマトペが子どもの身体表現活動を引き出す言葉がけであることとも一致することが考えられる。オノマト

ペがもともともつリズムカルな表情と、音楽のもつリズムという要素によって、手あそび歌が保育で日常的に取り組みられるものとなっていったのだろう。また、前言語期の乳幼児にとっては手あそび歌のオノマトペは、動作の理解を促すものであることも考えられる。日常生活の中で、言語として使われ聞きなれているオノマトペによって、それは何を表そうとしているのか、今ここにないものを想像しているのだということを明確にし、遊びに結び付けていく橋渡しとしての機能もあるだろう。

しかし、オノマトペには多くのメリットがある一方で、デメリットも指摘されている。小久保ら(2017)は、「オノマトペはメリットとしてその言語の根底にある文化、音感、リズム、表現などが短い言葉の中に凝縮されており、リズムによって体の動きがバラバラではなくなり連動してくることが考えられる一方、デメリットとして、そのオノマトペが表す基本動作を獲得していない子どもはやりたくてもできない」ということを指摘している。これは、手あそび歌においても同じことが言えるだろう。複雑な手指の動きを伴うもの、たとえば、各指を独立させて動かすものであれば、0~2歳では困難であることが考えられる。それにオノマトペが付随しているからといって、簡単に運動が引き出されることはないと思われる。この点については、音楽のリズム同期と、身体運動の発達がかかわってくるものであるので、今後の課題として検討が必要である。オノマトペに結び付くと考えられる一般的な運動がいつできるようになるのか、そしてそれに音楽のリズムがつくことによって、その運動の同期は促されるものであるのか、同期の可能なテンポはどの程度であるのかということは今後明らかにしていくことで、保育での手あそび歌への取り組みの際の適切なテンポや、適切な指導にも結び付くものと考えられる。しかし、音楽が鳴っているところに同期するということは、運動だけでなく、同時にそのリズムを聴くこともできなければならないし、手あそび歌であれば、保育者の行う動きを見るということも必要であり、さまざまな感覚が必要となる。近年、保育だけでなく教育現場全般において、明らかに発達障害と診断を受けた子どもだけでなく、「気になる」と感じる発達障害が疑われる子どもが増加している。保育者達も「気になる」子どもについて経験的に感じて、その時にできる限りの支援を行おうとしているが、幼児期の場合、保護者が子どもの様子が気になるということを受け止められる段階にはなく、フォーマルな形での支援につながりにくいことが多い。しかし、保育者達は目の前にいる子どもたちに可能な限りの支援となる取り組みを試みているのである。自閉スペクトラム症者は他の人と動作をうまく同期することが苦手なことと同時に、自分自身の左右の手を同期させることが困難であることが報告されているという(佐藤, 2019)。手あそび歌やそこに含まれるオノマトペを効果的に組み込むためには、今後さらに、手あそび歌などの保育教材の音楽のリズムパターンやオノマトペなどの言葉について検討するのが課題である。

## 5. おわりに

手あそび歌は、乳児期から幼児期前半であれば、感覚運動を伴い言葉や動作の理解を深めていくことができるものであり、幼児期後半になれば、自分の身体部位を別の何かに見立て、今ここにないものを想像しながら遊ぶ歌である。手あそび歌にオノマトペが含まれていることは、オノマトペのもつリズムによって、おもちゃなどの道具がなくても、見立てて遊ぶ創造性を大いに刺激することが考えられる。

オノマトペが手あそび歌にふくまれていることにはメリットもあれば、デメリットもある。オノマトペが理解できても、その運動がまだできなければ子どもは手あそび歌に取り組むことができない。しかし、歌とは異なりリズムを楽譜に表記された通りのリズムで表現するのではなく、振り付け自体はそれよりも簡単なリズムであったりもする。このような点を踏まえながら、保育の中にどのように組み込むのか、子どもの発達段階に応じて考えていく必要があるだろう。同じ音楽でも音楽はどの年齢にもフレキシブルに活動を提供することのできるものである。手あそび歌で、聴きなれたオノマトペと運動が組み合わさっていることは、乳幼児のさまざまな学習を支える活動の一つであるということだろう。

<注>

- 1) 手遊び・指遊びに関する実践的な本は数多くある一方、理論研究は少ないとされ、それがいつ頃から実践されているか突き止めることも難しい。そして、手遊び・指遊びは保育の中で「活動と活動の合間を埋めるもの」とか、「子どもを集中させるためのもの」で、「それ自体目的をもってやるもの」ではないと考えられる傾向が強いからだとい川 (2016) は指摘している。
- 2) 北村 (2006) は、あそびうたと手あそびの特徴を挙げた上で、それらは分けがたい部分があるとしている。そして、「手あそびが児童文化財の一つとして大いに利用されているにも関わらずその定義はあいまいにならざるを得ない状況であり、認識が統一されているとは思えない」と述べている。
- 3) 育児語は子どもの言語発達に大きな役割を果たして、その語彙面の特徴の一つとして小椋 (2015) は「日本の養育者の擬音語・擬態語の使用頻度の高さは日本語の擬音語・擬態語が英語にくらべ、語彙として体系化されているという日本語自身の要因も関係していると考えられます」と述べている。
- 4) 小川ら (2013) は、オノマトペは子どもの身体表現活動を引き出す言葉がけとして重要だと示唆から検討を行い、「日常的にオノマトペを効果的に使うことは幼児の動きやイメージの引き出しに有効に働きかけるものと考えられた」としている。また、葛西 (2012) の子どもの歌に含まれるオノマトペについての調査では、「それぞれの作品の中心となるオノマトペが楽曲の核として音楽に設定されている」とし、「オノマトペは「うた」の中で時に周囲の言葉以上にリアルな場面を描写しつつ、音による表現にもなじみ溶け込んでいる」と述べている。
- 5) 木野仁美 (2018) 「未就園児保護者に対する発達理解を促す子育て支援の取り組みからの考察—産科での親子音楽遊びクラスの活動より—」『大阪千代田短期大学紀要 第48号』72-81を参照。
- 6) 特殊音節とは、「トントン」の「ン」である撥音、「コチョコチョ」の「チョ」である拗音、「チーン」の長母音、「アッハッハッハ」の「ッ」の促音のことである。
- 7) 福崎 (1995) は、保育教材に見られる拍子とリズムパターンの特徴を3,973曲を対象に調査を行い、拍子では4/4拍子と2/4拍子が90%を占めており、リズムパターンでは8分音符+8分音符は23.2%、付点8分音符+16分音符は21.7%、4分音符+4分音符は14.4%、4分音符+8分音符は11.6%であったと報告している。合わせて2名の6歳男児のリズム同期の事例分析も行っているが、4分音符や8分音符+8分音符の単純反復は容易に同期できるが、付点8分音符+16分音符は同期反応が困難な傾向にあったという結果を報告している。

<引用文献>

- 阿部直美（監）・中谷真弓・浅野ななみ（1987）. 幼稚園・保育所実技実習シリーズ2 0～5歳の手あそび・指あそび. 東京：明治図書.
- 福崎淳子（1995）「保育教材におけるリズムパターンの特徴と幼児のリズム同期」『日本女子大学紀要：（家政学部）42号』5-10.
- 今川恭子「第4章 乳幼児保育の環境をつくる、活動をつくる」小西行郎・志村洋子・今川恭子・坂井康子編（2016）『乳幼児の音楽表現—赤ちゃんから始まる音環境の創造』中央法規出版.
- 葛西健治（2012）「子どもの歌におけるオノマトベに関する一考察」『こども教育宝仙大学紀要3号』33-43.
- 木野仁美（2018）「未就園児保護者に対する発達理解を促す子育て支援の取り組みからの考察—産科での親子音楽遊びクラスの活動より—」『大阪千代田短期大学紀要 第48号』72-81.
- 北村恵子（2006）「保育現場における児童文化財について その1 —音楽的環境づくりの視点からの手あそび—」『児童文化研究所所報』第28号27-35.
- 小久保路子・小川かをり・佐藤隆子（2017）「幼児教育の表現領域におけるリズムの重要性についての一考察：音楽、運動領域におけるリズムの役割から」『東京家政大学教員養成教育推進室年報4』197-205.
- 小川鮎子・下釜綾子・高原和子・瀧信子・矢野咲子（2013）「幼児に身体表現活動をひきだす言葉かけ：オノマトベを用いた動きとイメージ」『佐賀女子短大研究紀要47号』103-116.
- 小椋たみ子・小山正・水野久美（2015）『乳幼児期のことばの発達とその遅れ—保育・発達を学ぶ人のための基礎知識—』ミネルヴァ書房.
- 斎藤二三子（1986）楽しみながらことばが育つ：おもしろ手遊び指遊び. 東京：すずき出版.
- 佐藤徳（2019）「2章：共同行為：二人の身体と心をつなぐ行為の仕組み」日本児童研究所（監）『児童心理学の進歩2019年版』28-51. 金子書房.
- 塩野マリ（2001）0・1歳児のふれあい歌あそび. 大阪：ひかりのくに.
- 武田道子（2015）幼児の生活に見られるオノマトベ：音楽的意義と活用への一考察. 常葉大学保育学部紀要, 2, 13-23.